

令和 6年 11月 8日（金）

3歳児 『いのちを感じる、いのちと向き合う』

【エピソード】

教室には、子どもたちが園庭で捕まえた生き物がたくさんいて、どれも子どもたちにとって大切な仲間だ。その中には R 児が捕まえた大きなカマキリと、A 児たちが捕まえた小さなカマキリの 2 匹がおり、飼育ケースはそれぞれ別になっていた。

この日の朝、小さなカマキリの飼育ケースの前で R 児たちが大騒ぎしていた。

「ちいさいカマキリが『でたいよ！』ってしてる！」と H 児が叫ぶ。みんなで覗き込むと、小さなカマキリがカマを勢いよく動かしているのが見えた。

「本当だね。」と担任が共感すると、T 児が「だしてあげようか？」とみんなの顔を見回した。

「そうしよう！」という声があがり、T 児がそっと小さなカマキリを飼育ケースから出して教室の床に放した。小さなカマキリはスッと動き出し、大きなカマキリのいるケースの方へ向かって歩き出す。

「おかあさんなんじゃない？」と A 児が言うと、K 児が「そうじゃな。R 児くんのカマキリは大きいけえ」とうなずいた。

「じゃあ、いっしょにしてみよう！」と提案が出ると、R 児も「いいよ」と答えたが、T 児が「でも、ケンカするかもよ」と少し不安げな顔をした。

すると、H 児が真剣な表情で『ケンカしないでね』っていってみよう。それでカマキリが『うん』っていったらいいよ！』と提案した。子どもたちはそれぞれ「ケンカしないでね」「なかよくしてね」と声をかけた。その時、小さなカマキリがカマを振り上げた。「あ！『うん』っていつてる！」と R 児が喜びの声をあげると、T 児が「じゃあ、いれるね」とそっと大きなカマキリのいるケースに小さなカマキリを入れた。

ケースの中で向き合う 2 匹のカマキリを見守る子どもたち。その様子に満足したように笑顔を浮かべながら、それぞれ自分の遊びに戻っていった。教室には、どこか穏やかな空気が流れていた。

1 時間後、R 児がふと思い出したようにカマキリの様子を見に来た。だが、目の前には、大きなカマキリが小さなカマキリを食べている光景が広がっていた。

「もお～！ケンカせんでっていったのに...」と少し怒ったような、でも悲しそうな顔でつぶやく R 児。

その声に気付いた A 児、T 児、H 児、K 児、I 児らが集まってきた。

「やっぱり、別々がいいね」とみんなで話し合い、すぐに 2 匹を別々にすることにした。

その後、周りの子ども達が小さいカマキリに夢中になる中、R 児は一人、大きなカマキリのそばを離れず、じっと見つめていた。

10 分ほど経った頃、R 児は決心したように虫網を片手に飼育ケースを担任のところへ K 児と一緒に持ってきた。

「にがすんで。せんせい、てつだって」と R 児。

R 児は 2 週間前にカマキリを捕まえた後、友達に「逃がしたら？」と促されても「いや。」と言ひ、園庭に遊びに行くときもカマキリを連れて行くなど愛着をもっていた。

「どうして逃がそうと思ったの？」と心境の変化を担当が尋ねると、R児は少し考えてから答えた。

「かわいいから。おなかすいとるんで。」

担任はその答えに頷き、R児と一緒に園の前にある五輪坊へ向かうことにした。R児が指差したのはエノコログサがたくさん生えている場所だった。

「ここがいいかな？」とR児が言うと、K児が「そうじゃな、どこでもええで」と笑顔で答える。

R児は虫網をそっとカマキリに向け、エノコログサの上にカマキリを放した。カマキリが細い葉にしっかりとつかまる様子をじっと見つめながら、R児はほっとしたような、それでいてどこか寂しそうな顔をしていた。

そのまま帰ろうと一歩踏み出したものの、すぐに足を止めて振り返った。R児の視線の先にはエノコログサに揺れるカマキリの姿がある。R児はもう一度虫網を持ち直し、そっとカマキリに向けた。そして、カマキリをもう一度虫網に戻してしまった。R児は、じっと虫網に戻ったカマキリを見つめている。

「逃がしていいの？」担任が声をかけた。

少し間が空いて、「にがすんで。おなかすいてるんで。こっちのエノコログサにする。」とさっきとは少し離れた場所にあるエノコログサの方へ虫網を向けた。R児が選んだもう一つのエノコログサにカマキリを放すと、カマキリはそこで落ち着いた様子だった。R児は少しだけカマキリを見つめた後、振り返ることなく園に戻った。



戻る途中でR児はふと笑顔になり、「エノコログサいっぱいあってよかった。」と小さくつぶやいた。

その表情と声は、心の中ではまだ少し迷いが残っているような、でも、ほんの少しの安堵と新しい決意が込められているようであった。

【考察】

○自己肯定感を育む視点

【カマキリを逃がす過程】

R児は、2週間という長い間、カマキリを世話し愛着をもつ一方で「どうすべきか」を考える機会を得たと考える。当初は「逃がしたくない」という気持ちが強く、友達に「逃がしたら？」と言われても、自分の考えを貫いていた。R児の良さはここにあり、自分の考えたことや感じたことにとても素直に行動する。そして、その行動全てに理由がある。自分自身をとことん信じている。だから、このR児の姿勢自体が自己肯定感の表れであると考え。友達もR児の「逃がしたくない」という気持ちを受け止め、一緒に世話をしていた。しかし、この日は「かわいいから」「おなかすいとるんで」と自分なりの理由を見つけ、逃がすことを自ら決断した。この変化は、カマキリのために自分の考えを見直し、新しい選択肢を自信をもって選べる力が育ったことを表している。これによりR児は、「自分の決断を信じることができる」という自己肯定感をさらに高めたのではないかと考える。こうしてR児は、いのちに出会う体験や様々な感情体験を友達と一緒に重ね、自分の大切にしているカマキリを友達も保育者も大切に思ってくれていることを感じていたと考える。こうした体験が能動的に環境と関わり、自己表出しながら生きる喜びを味わうという内面の充実につながり、自己充実に深く関わっていると考える。

【カマキリを逃がす場面での葛藤】

R 児は一度決めた「カマキリを逃がす」という行動に対し、実際にカマキリを放した後に心の中の“寂しい”“手元に置いておきたい”という気持ちが強くなり、それを行動に移して網に戻している。この行動は、R 児が自分の気持ちに正直に向き合った結果であり、感情の揺れを否定するのではなく、そのまま受け止めたことを意味すると考える。幼いながらに自分の迷いや葛藤を認め、それを表現できたことは、自己肯定感を高める大切なステップであると考ええる。

R 児の葛藤場面で私は、R 児がカマキリに強い愛着をもち、逃がすことに迷いや葛藤を抱えていることを感じ、「本当に逃がしていいの？」という問いかけをした。R 児の気持ちを否定するのではなく、心の中の本音に耳を傾けてほしい、もう一度自分の気持ちや状況を振り返り、納得した上で決断してほしいという思いがあった。しかし後々考え直してみると、言葉をかける際にもう少し R 児が自己内対話できるように待てばよかったと反省するとともに、本当に必要な言葉であったのか（見守るだけでもよかったかも）と疑問も残っている。

担任や K 児が R 児の行動や葛藤を見守り、決定を尊重したことで、R 児は自分の決断が受け入れられる安心感を得たのではないかと感じる。これは R 児が、「自分の気持ちや決断は大切だ」と感じるきっかけとなり、自己肯定感の高まりにつながっている。特に最後は、迷いながらも振り返らずに園に戻った姿は、R 児が葛藤を乗り越え自分に自信をもちつつあったことを示していると感じた。

○温かな感情の芽生え

これまでのカマキリに対する R 児の言動からは、カマキリに対する愛着が感じられる。さらに、R 児は 2 週間カマキリと一緒に過ごす中で、単に楽しむだけでなく、カマキリの生きる環境や状態について考え始めていたのではないと思う。

最初に小さなカマキリを大きなカマキリのケースに入れようとしたとき、R 児や周りの友達は「お母さんなんじゃない？」とカマキリにも家族のようなつながりがあると想像していた。このように、生き物を擬人化して考えることは、豊かな感受性が働いている証拠であり、その中で「ケンカしないでね」と声をかけるなど、生き物にも感情や意志があると感じ、愛情をもって接していることが分かる。

大きなカマキリが小さなカマキリを食べてしまう場面で、R 児は自分の選択の結果と向き合うことになる。「もお～！ケンカせんでっていったのに…」という言葉には、行動の結果に対する悔しさや悲しみがにじんでいる。この体験は、R 児にとって予想外の出来事だったが、それを通じて「生き物の行動には自分の思い通りにならないことがある」という現実を知り、受け止めるきっかけとなっていた。その後、「おなかすいてる」という理解を示すことで生き物の本能を受け入れようとしていた。この発言には、カマキリをただの「飼う対象」ではなく、命ある存在としてみている視点が感じられる。これは 2 週間、R 児がカマキリに向き合ってきたからこそ育まれた気持ちである。

また、カマキリにとってより良い環境を探し、逃がしてあげる行動には、R 児の自然や生き物への優しさが溢れている。

この体験を通して R 児は、自然の中にある命の営みに触れ、そこから学び、命に対する温かい感情をさらに深めたと考えられる。

○思いやりの気持ち

R 児が友達から「もう逃がしたら？」と言われたとき、最初はその意見に応じなかったが、この日は友達や担任との会話の中で自分の気持ちを整理し、考え直している。友達の発言に耳を傾けながらも、最後は自分で行うという姿勢は、他者との関わりを大切にしつつ、自分の主体性も守ることができたことを表している。

また、逃がす際に友達の子が「どこでもええで」と笑顔で支えたことから、R 児は友達との関係性の中で安心感を得ながら行動を決めている。このように、友達の言葉をきっかけに新たな行動を選択する過程そのものが R 児の他者への信頼や思いやりを深めた要素といえる。

周りの友達も R 児のカマキリに対する気持ちを受け止めていることから、R 児への思いやりの気持ちがうかがえる。カマキリのいのちも大切だけれど、R 児の気持ちも大切であると感じたのであろう。R 児のカマキリへの思いを受け入れ尊重したことは、思いやりの気持ちの表れであると感じる。